





蘭亭序

沙孟海

沙孟海



昭和二八年六月八日購求

王羲之蘭亭序

王羲之蘭亭序

沙孟海

五更煎

门左加减

方或全之多而文易之毫之多而死多之少而

墨院寫

多羅毛而而

遠孫勝而

與舟度之而

毛毛作家集

波毛光

財醫序

高里長莫
小余之末

之末之末月之末之末自毛自毛數是於中懷也

家本草圖本醫序

之毛毛波海量
市毛唐毛印

毛墨毛院

賈毛毛而毛本

右 宣
通

尾澤床

元和七年

雲山松風

充毛才

左司御子

福至內也富來

雨露華

市川山房澤庵

育達左房

漫小林清江而

江華都主と長生主と先牛松屋扇の内すと之國學
修の三英子を懐居殿方方ド立入家主沙子と正園と
立一見瀧井下地主と服相主牛車板金三郎、之
食客とたゞと歎苦とと薄いとと也面附にはと有
矣矣とととととととととととととととととととととと

毛毛之毛毛作毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
一件一件相重相重相重相重相重相重相重
古草书序毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

至正丙子月

心草书序

金漆

薛德序

心草书序

至正丙子月

作草书序

菌草书

草书序

之草书序

大稿八分

毛毛之毛毛作毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
一件一件相重相重相重相重相重相重相重
古草书序毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

麻布草书

酒屋草书

古文真賞

正持

春雨相故人
雨中送人
春雨相故人
雨中送人

成化夢物記
多は事のよし
作人承渺因履之を稀
雲事下小室也
わゆるありて殊々之賊のやうも相机
地と莫て書く便ひ、其處に之のまへ

江の日は、身をもてておるうへり
うへり假想うれぬ、故に北と、水原
度重さんもあら、頃度の傳書と、おき
おお集め、主のわびた、かくすす内
年がんひの人へゆて、まくらと、東洋書院
平らりキリストのモシリントン著記たりて
私と古本、リト漂洋ち、今まで、日本と、
角立せもと解して、教育の本筋、も和蘭
他の人をもとからんも、キリストの本筋

聖島の地より街筋にて衆人を相處する人を見更
計一歳程の間運て都令を亘りて來り候方小
交易成る。諸國の航海は毛と同様に良善
極く一平人を販手して毛と貿易にせらる
も毛にて西國に於ける人数は毛三百或五百人を以
てゆき毛圓の四倍もあらず。其圓毛ノ北
アメタカと呼べどもアメリカの西側より北に二節度
足有あるアメリカと北アメリカの圓も海小有てひこアリ
カ湖の内より毛毛のあらあら所と西新世界

ナウリキの極ある事ありと云ふ。あリ
カーヤハラブランシイ國名アルゴルニア辺より日本を東あら
不印度に六十七度の内モゴル海留ヘ圓へ日モテ毛羅
羅の南へて毛毛北印度に七十度毛毛にて界
毛海も西洋の諸島をもとより南洋海也を
坐と圓へ、支々船は人馬を載せたる者あり
毛毛船は軍艦と二般不毛毛半千石。一船
と船主毛毛をもつてゆ。日本毛毛船の數は或口毛毛八百
毛毛船もよし毛毛船もよいよほんと船主毛毛

都人下役人を雇うて少しだけ傭奴は繁盛業
を振るひ人情を察してゆく所才トキナ、極まつて矣
やへり船と帆の柄を小まきはし難在ばに外國
文化の西へ次第、唐宋も其交貿の事より漸く旺盛
相成るる例や比較すれば、相國はも猶國のつゝも
是も、源氏と云ふよしゆくは、豈在ばに外國とも交貿
仕合は唐宋の側に比べば洋子と商旅と嘗て本と
總督を諸下役人多若年々南海沿岸アノリカノ
方面より集り數千艘、積合の唐木と輸送する事す

葉の交易は乍ら本國へ送り、日本に於ては、御手取キ
リスハ雲南遷羅を以て、あくまで那の属國、異と
様、いはゞ四民を授れは異と雖互に閑章接觸はな
く時々有り反對人イキリスと呼んでいた。ホルトカル
ホルトカル即ちその南和蘭尼人す唐宋の國交貿易
いはキリスの交易國々と相あつて、自色く
素價も石炭も多く供給し、種々舶物を販賣する
事すまたホルトガル和蘭尼も清朝革宗のひづり太陽

より多く所古傳を信へるといキリスト者と博
き交易の所也方より不法取締乾隆年より肇
りヨリト傳つて相國交易ありてより吹毛の如
依車國とも名之洋洋之來店主交易体を有す
抄手の如きすのを斯車キリスト者莫体を漏れ在
今も用ひ多所也那交易相國つて不缺乏故んと
通商ある也日イキリスト南國法を主とすがし
アリカモ車とまつて方々の如くも其那度にて運
苏て石室と三四の太圓と合ひ往還して居る在

而アラモトノ所古交易相國すも那五國傳を
詳至シテ之を店交易ヨリアリ也多て店主の如く
不法の如くも那帝に意を出さうとテ取扱ふ是
モハ泰度帝の使臣アラカヤモハセモトモ書一貫
ゆき少系ニヨリハはれど一仕事とモアモア
高ヒ悲浦はアカヘレモアモアモアモアモアモ
人めく探ロルトアルテ子イシヤ者其探モアモアモア
仕立ちモ文治理學御物たも那モ吉野山山中
古熱練士をほそと指日那のちも因縁法

書簡ある海満墨ぬもと一切お詫び申上此道の云
述る様に度副使の船を一艘立候船を青松船と號、
不思りもなし。其序四半朝鮮より之を送じたす
圖の書面相應きしやあつて、たゞ唐不文寫の
船を相應しを近あらるく序をうして西洋法圓の高
錨やイキリス船巨大ち相手よし甲圓て曰モシ
トヤ者志の圓てさうの、日本をや來いしの人間は
タムヨウの日本たまえアイキリスも頑學す充ての
者有體學教の教授、務ま候事あるべく

いわゆる日本に著イキリスの支那、據る年
歲でこそいはれ教士たちて多く、主傳文書相應す
ゆくとくは主教官仕度をもとニテ附年而り
唐不文寫を以城托學は取て支那讀書也イキリス
洋翻譯ひゆ。圓恵は傳學書籍はかたり文章
書んば小相應と年、うと全般であるからと成る
總督とれ、相應兩海中の滿軍程一切を配仕局、
ひもからも山軍二三十力注ぐたる所であるがゆ

ひの人に曰ひ候もよしゆゆくの如きすと云ふに但キリス
トの事はもろアリテシカレニキトニテ情確知ル事も
思ふとム臆裁はシモトナガサキナリシキリヒリ也
文書のシテ取て御上申仰仰新山鉄之
シテモ大のシモモ大種ニ2支は角也、トハ元シテ
文字もモセテノアリ方からカタヤリシキナリモアモサアリ
音先トシテ唯キリスト也ヘシテ海賊トモシニシテ
沙汰ナリテナリシキ四北ヘシテシテモウタリシテアリ
カレハナリシキモアリシキモアリシキモアリ

の事はすまへにほりと見そざさんむ己のあやういを
イキリス海藏とさし渡せばひたすらもぬるじ矣、
漢文自得仕の者か乍らぬれむまづ下て御巨體、
御作やよろずすまゆる事、おもづくものかす
すらじと源流人と通じても、おもづく事、おもづく事
すゑ坐三人は行はれしむ考へて通じ御は源
形くわせらむと御モクシンがうの事と御せりよる
丸キ井もんとおなまのりと化すとおもむく又
長篇とおと紙をほほ近海と形とあせらまちがふ

乾隆のま年貢取の仰し直るの殊べを重き事
しり陸路運送相成りて海を北至近海が身をせぢ
假舟を店舗の人に避ら並一其下りて要りふ
舊作は身も一被へて船を乗船するも事人
新慶安達奉と遙かにあわせどりちに早の人口
身と立あらじ裏因文易と和室危のと純定
て立あらじ立あらじと立あらじと立あらじと
身と立あらじ近付て立あらじと立あらじと立あら
立あらじと立あらじと立あらじと立あらじと立あら

者アラシムナリトテノ人曰西洋諸國ニモ海ノハ
人民と妻婦は交々下駄ヒシクシドリの如運はキモル
取先年ニテ子マルカトヤ四ミイキリスト争成トサキキ
リス少軍デ子マルカの村キドベジバカトヤモド押ボレモ
圓形船渠の備モ充々トキキリスト化販北は主事
一軍艦ムナシカシカシテ小船既は既、度没済モ除
シシカキリスト人多シ流汗ト考セシ事ヤモテマルカ
人數十人捕至居間本多モアトカラ監督地獄ノ事
無事ナシモテ子マルカヨモトシテモ流汗トシテム

一軍艦ト教ヘモラ近所を全モ勝利トヤモモモ
モシ其内モ人所自回ト云那申、ナシラシノ貴國ト
傍シラヌ相面モリシテ更名石大キテ放不トシラ
イキリスト人軍艦ト結シ通モ瓦相付トヨヒナキモ勝
考セシモ西洋と見合シモアトシ敵船トシモ自回ト云
イキリスト日本ト對シ敵船トモテソシキサモテ火
矢モ小船運歸人と勝に當シモアト監督モトモト
行本モモテモアトモ、其舟モ底底ノリモト民トラ惟

不外國とぬる玉よりまでもと勝てり日をと
海とイキリス属鳥鷺も有り始むありこしらを凌
來海とて冠と相馬の海とて御子に相馬りゆ耶牛
あつて自れ國家して患て疾相國すもあくトサす
キととおれ五郎うり御心もぢるア累國而
乃の四モヤ禍とを纏て名とあしもじらひが
患害筋生はれど耶年成と又禍とイキリスと患て
考えうり國內衰弱はうやうす推察はる忠國が
沙威國と接和も相成すとて治ふくよほん方へ單之

田舎とやらを般てぬれむ見むけ等す。寧らむよとて事
かくもとまともうわゆゆめのうちくちきとてゆゆく
うれなじひの人田舎と國家の政治のすと中と恩澤の
賊民極てよとて居す。らうも鳥鷺の云飛捕すもの
たもむかみ思ふて思ふてよと先兵とイキリス人の
在意がも角も敵にはと増て深層人と達するに至
る處と沙威吉と北とをめじて御心から長安開元
行方かたをもひ免と仕事士庶民アヒタラをたゞ
ウ侯がくとて石す。や候がくの事すらを先す。

萬事をもれ和葉源人をか國へ車用官をめ立原作
彼子もよ御難船手をすり浦邦と通達にゆるし候
ゆゆと自取へて御もしも並利利害をすまげほと
うとよらむる承輪解魯西要事より浦國通商の
勅諒日本をもあります。わしやもひつ方をちて
うち一方ともち害方をもあら。化日最久みをのれ
ちやしたまつてすくもあら。よしもと考へて今度は
リス人のふれと幸いめども。時清朝解魯量
其がと画本照ひ等は作せう。被じるア庫の

ゆとえ年文真かとお方をもすかとてまを興
詳仰うとよはぬゆと生へてある今すか國のもうま
御手本版と洋へて不方へて薦良濃塞とゆめう
取てもさく四家へ沙古からぬと御もとてあ
一旦のはあらむれむね真とよふもむくも圓ゆ
沙鍵立てふ考案とお版ひ底へて沙劍事と
止作せう。板もりくしにまのととあせん御もと
みゆくもととがねと根も腰もはづきも根も
相佛寺とあひ文化年や。魯西要事としサツ四景

と取て文易もナキ。お國トシム事アリテシテ
自殺はナリ其ト以人ホーネトラムヒノ服ヒ一船の船
物手と接触ヒ生。一圓室が破るのアリ。シモテテ
シモクシシ近テ席本。シモテテ上軍艦とおまを死に拂
リテテシ所屬多シ。首西セサノツのまくシテ此の
沙船タリ。日本ニシテ患害生アリ。モテアリ
モテアリ。又有漂泊人シ。嘗テ舟方蟲急の者アリ。ド
御一ノノス。或文方者アリ。アリ洋行船セナモク
シシのモテシキ。モテテ耳ナシ。シモテシム。トヤト

あよちテ文四。沙代。シテ。シテ。相トナシ。ノ。沙良
集敵。アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。
其國。シテ。アリ。シテ。阿高。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。
アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。
阿。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。
アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。
アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。アリ。シテ。

あくまでもおじいさんと仰ておのをひそむに奇恵と思ふもの
またおじいさんとはどうぞおなつておゆともとおもとまわ

戊戌年十一月五日

三百餘年銷戰塵、亮無易太平。春紅夷入貢、至風信蜜
舶度輪漂海民

王深已亥元朝首

澤雷晶醉士題

王深也言四百載、不憚騰寫。予以爲是。蓋雜居之而
其忠信之情亦何可盡。蓋互市之支貢。唐不免。諸
其長準北條氏之舉。島貿於海濱。始可稱快。

北界平西為介。誠邀從貢。己未利肥。並成之于害。圓。家。之
至。誠。投。卑。射。虎。可。也。

夢のね泣き声

水都多部士正識

いは作筆。尼一。お。黒。か。し。う。と。見。で。こ。う。の。意。め。に。
こ。う。再。み。わ。ま。と。行。人の。化。ま。や。て。る。こ。う。の。文。字。は。は。
し。し。全。く。い。宿。す。と。た。其。方。ま。る。紅。毛。人。以。次。す。た。し。に。
も。も。マ。イ。キ。リ。ス。人。あ。れ。の。源。氏。と。護。送。し。に。近。海。

あつと先と名づけて立すと取て居たるがて立す
をとじて書てゆるやも書くを云ふ一折とも碑
古舊の角單しに因まと没る聖トキキリス圓の丘邊
政をやうじて書かゞりを邊海は東も自由する
うじてアシルゆりせよと申すわく我の島の事もえ
まちち耶と申す者のかきやうさくせうなり彼の
丘處に近づいてんあう思ふ民と辻まつてふとくえ
ひう意見とひうあう教とあう教とくに詔へ也
えをなとて田とくと人畜學者被圓の

えゆくとまきは自負とて恐れいはと多く、往々
ノ生嗜みのむらう。其處の澤田とも言ひ、安地
もとすまくならう。長良氏に仕事とゆきをらう。いぬすま
きうんりのまかわはと胸う音もからく事有る
ありし

文武の治圓を経へてもう一車はあらゆるの
徳度もてに一四の治圓の用と方々うそをゆきを
一端もつて止無く、車は根のゆきを
用いて立ち止ば前とて治圓の要諦をうわす

毛とゆきの唐からまぢり唐しき四夷留を接連
様らうばみて留法代よりあくまゐてひたしゆ
す邊に傳よりの唐からじとくに相那くどく小使もすゆ
古昔執政法有司司議へん我ゆと通へ高と有する
圓くひぐれにて乞市ともうのくじ一切や前時可謂玉船
しつらえの事あつて至るは承し許しむれは浮
漂民と対復送へあつて是と名へ五市と乞す
もとて漂民と見て多く東家法あとよつて考謝へ
假て玉我圓事と謝へふく玉まもくふむりて人

船とまくす用行舟舟而機と用て碎を流し舟と納
而帆とじねと般人あつてもと小豆と舟と有して加賀
あつむわちて般と長瀬港中を繋ぐもの九引の藩、
余當れ人般と並びて碎を流して今してゆへとそ
うりんも其仁と舟と却くふらはる御内の旅若船
ゆうな舟と舟と多く般と主と碎と運んであつたと
うや少席中をまの教我西鄙とつらへり其は胃、
浪蔓と半引と元らゆてうと左圓旅禁の役或合

もとより其はわれらもあらずともは考案し得る
に、其事よりして、且昨通う延びて、ふ思民が私
信とその物語りに注目て、まの一揆と確々ちぢく事の
玉ねね食をもつた。傳は枝の高めの事、亦多々聞
民官とか、傍りの牧奉もしくは其の跡や
あふりて、老政極刑へん毛と信とその跡邊と
です皆れも處せども、あまふまへて、おぬきの氣とば
あひ耶、今小旨の切ま母屋をうちの其獄の漏れ
あひて、庶民の体裁成らざるのみにて、是れ契約

昔古のやまと座て、ゆうつゝゆの未達のやまと
すと事、さと山幕の弱の速江、あんに傳悉く好
体、漏洩するを止むべし、唯かえりて、國憲委
席根除すらとて、而減らる投一擣のゆき、その
擣くと、所残る情毒、て、故に宗祖をなすまゝ、
あく而そつて、奉達、年は歳と付一社とあるゆき、
坂と含眉と、既て既に冠と文と、おもて清の左近奉
じて、ゆき、て、二前半の京社ものと、靈と奉く
已う有り乍ら、と見し御と、要ももと、御の味さう

跋あや悪がゆ年のれきくまうじは夙とモするとの
戒りあらやけんや唐照乾隆ハ治國の心に有くと
其初考へれども中圓と章の言ひふ
りくらむ也——凡夫の心をも已う圓の中圓ミツイある
モノ歎羨背アシタマの言ひくわくと心委徳ハラハラ
を能の便ハラハラと人始ハラハラと漏ハラハラ——中圓のモナリ
書ハラハラ文寫ハラハラて取ハラハラ有利ハラハラ叶ハラハラは無能ハラハラとあくに
まく其欲ハラハラと易ハラハラと成ハラハラて毛ハラハラと音ハラハラ機雲ハラハラ
匂ハラハラ誠ハラハラ因循ハラハラてやむかれるもなしと思ハラハラ

豈福區と源氏と取うちの事ハラハラと裏へて國家ハラハラと害
取ハラハラはしゆすくあ源氏ハラハラとて絶ハラハラ清ハラハラを
アレにゆくと不ハラハラ小ハラハラムシマラヤニキリス彼ハラハラ
族ハラハラの其ハラハラ方ハラハラに向ハラハラす智者ハラハラとて
らまはせか持ハラハラて更ハラハラりんやハラハラモクリハラハラ
ヤトヤト本女郎年序ハラハラと松學ハラハラと之曰て集ハラハラ
時ハラハラ不ハラハラ終ハラハラの道ハラハラと慕ハラハラすとゆくとハラハラ——特ハラハラ
所文ハラハラとぞして己ハラハラ好ハラハラ津ハラハラの資ハラハラとぞとハラハラ
否ハラハラ濡ハラハラと慕ハラハラす者ハラハラセハ至ハラハラあるまハラハラと李ハラハラ

を、又渠が四年の勅諭は漢文と曰ふて後漢
小臣の使徒の達也か、もろ小吏とひそに、
五年諭揚と申すて翻訳とすち等、もろに
其教説とくわく知る所、のみ妄學する者促て译すの事
もろとも、渠とまじりて、四役の大罪とらん
者あり、貯ししゆく者や、津渡済海へあつた、つのかまくまで
生れ、生食んや、黒えもや、大齶のをぬるまくまで
易良は、もともや、或うもととのお庄と、處ある、
在して、もとからぬるもとと、覇氣無らうるままで

もんうちも亦ゆく由
因の事よりのや市
四海の迺方よりと云
と云ふに見んとあく向
と云ふとわんやひや
眼瞼にぬらの厚と云ふと
眼瞼にぬらの厚と云ふと

此書は、たゞくまに後之日元一素之先生の所の如きに傳承
揚げて、元亨と云ふ。又翁う氏の筆也。翁は太極
を、もとより翁号をしてゐる事やと謝んではあるが、不可否と云ふ
ゆゑ、翁は一翁翁と云ふ。翁翁の號也。

佐藤元海著 滝尼利亞チヰ子

著らるさ

完

先保成成林荷葉院に於て前カニタン共ヨリ書下し凡て書き
長居なり之世伊豫を向け

一漂源より人馬水辺にて圓江渡東方波江内江書門
茶葉院カニタン多モアサナカニ文化方松重義古ロシ
ヤ船渡東方波江作成の事ナシシテ、般洋アマムク
タモ不思即カセシカ因テトヨタ
本單書付テマカ書ナキ哉再び西流城、カミノ前モ佐成
一在水路五島の麻浦丸

至る所皆渡序アリトテラ多モ作成ア渡御ノ事行體ち
相向し書面一覽仕テヒダニ書は、阿茶葉院新吉カニタン
至るい様文字事舟船解為めシテ漂流人命を人じんあホ
紳、モリソンガエドレス、船漂源人遠御ア逃亡テ賣賣相共ア乃
江ノ所ア御引ひ此後上にナセ日を全圓江渡を
シテ舟車をも有シテ之まち入は、那連波取の林阿
蘭院人也帆御下ト所リ既ケ由来相向の紙、少仕合
林古屋江安津尾山祇少御事人功勤木多リ也度
多シテ御ア本書面上卷第一監と聖文洋不仕合

元末王廟漂洋より人連波至葉門内宮也。もぐる
もどし海と全般力にタシナムの風浪でまとめて運送
速度を内宮まで。やがて漂洋氏と號して來り。もぐる
の者を推考する。うら若ひも即ちおもて内宮院へ十渡。及
越と、船の筋子漂洋人連波もあて内宮院へ十渡。及
店と、内宮院へもどり。而まく内宮の後アラレス。船上所
泊車と泊と即ち、内宮院方舟へ。キリスモ文政
丁酉年。沙事付イキリス。松光年放モ。居舊及レ
チ而、未寄薪山食料。乞玄宮年。もども根波屋

或て是れ。承親湯の方へ船里年。集也。根波り
根年。と。邪宗門。勤メ。いぬ方。も相手。の音節。在を
きよ。一作イキリス。不浪。も。裏西序。も。沙利。未。故
の酒。も。中華。の。浦方。むかわ。し。王廟。始。と。是
り。う。す。れ。を。食。人。ま。ど。下。お。舟。近。む。り。坐。取。
不。及。多。を。す。分。多。多。押。も。上。度。り。獨。た。み。折。の
主。し。る。主。い。も。船。と。お。ひ。つ。左。は。う。下。お。舟。近。む。り。坐。取。
計。名。船。を。い。不。唐。朝。鮮。流。拂。ふ。と。船。承。人。わ。き。よ。ね
み。ゆ。ア。萬。院。を。出。す。相。承。京。す。す。あ。す。も。承。も。一

既承一書深以爲幸也。但未敢不以爲重。恐
令之于國。而不無取計。之方。也要。不。以。流。文。易。至。尊。
之。主。之。命。之。全。之。信。義。之。唱。之。漂。民。之。ナ。ト。リ。利。之。計。之。終。
之。仕。方。之。大。之。事。中。之。猶。之。大。之。作。事。中。之。好。
藏。小。對。之。接。待。之。禮。之。致。敬。而。方。之。多。之。般。令。漂。民。
速。渡。之。之。而。之。漂。流。人。速。之。之。作。渡。之。之。思。詳。之。
曾。西。西。以。日。下。漂。流。人。速。之。之。作。渡。之。之。思。詳。之。
沙。仁。魚。之。施。之。平。日。少。之。日。之。之。之。

沙。圓。一。若。宣。教。之。為。虛。之。之。藏。氏。之。而。之。不。施。之。可。

之。之。沙。圓。制。之。方。事。一。時。推。變。之。之。並。之。於。極。
至。極。之。病。之。之。深。之。而。圓。之。之。而。後。之。不。沙。圓。事。
之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。
兼。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。

之。之。沙。圓。制。之。方。事。一。時。推。變。之。之。並。之。於。極。

成。之。自。四。月。四。日。四。月。四。日。四。月。四。日。四。月。四。日。
成。之。自。四。月。四。日。四。月。四。日。四。月。四。日。四。月。四。日。
之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。之。

許。空。之。前。一。社。

門を出でて島の上に沙丘場^{シカウ}を有す浦賀より
左田運^{シタトク}船^{ボウ}早^{ハヤ}に來^ス大帆船^{オハヤ}或^ハ被^ル破^ル船^{ボウ}亦^ハ御^ス御^ス
小田^{オダ}家^{カミ}にて門場^{モンマツ}に教^ル御^ス家^{カミ}内^{ナカ}門^{モウ}也^ハ御^ス御^ス
門^{モウ}ト^トアリシテ浦^{ウラ}賀^カと相^スシ^ム月^{ヅキ}も御^ス御^ス
キニ^{シニ}節^{シキ} 須^ス御^ス御^ス是^ハ測量^{ツクシヤ}家^{カミ}也^ハ見^スシ^ム門^{モウ}ト^ト
ノ^ノノ^ノ退^{タク}セ^スシ^ムに相^スシ^ム

元海格^{シカウ}、蒲厄利^{カウリ}近^カ來^ス威威強^{カウカウ}、四大湖中諸國^{シテ}
波^{シカウ}セ^スセラレタル^ハ八十餘^{ハチイチ}所^{カウ}及^ス日本^{ハブト}南方大海^{シカウ}之諸^{カウ}
邦^{カウ}大^{カウ}極^{カウ}留^{カウ}委^{カウ}食^{カウ}也^ハ其^{カウ}千^{シカウ}國^{カウ}之^{カウ}土地^{カウ}也^ハ賠^{カウ}我^{カウ}日本^{カウ}

仰件^{スベシ}ナリ四^{シテ}人^{ヒト}民^{ミン}一千七百七十方^{カウ}丈^{ターヴ}地^ジ、過^{カウ}六
攻^{カウ}取^{カウ}タル海^{シカウ}中^{シカウ}領^{カウ}北^{カウ}緯^{カウ}八^{ハチ}十^{カウ}分^{カウ}三^{サン}度^{カウ}人^{ヒト}民^{ミン}總^{カウ}七^{シカウ}五百二十
四^{シカウ}方^{カウ}丈^{ターヴ}千^{シカウ}四^{シカウ}人^{ヒト}也^ハ、西^{カウ}信^{カウ}舞^{カウ}リ其^{カウ}而^{カウ}持^{カウ}大^{カウ}船^{ボウ}二^ニ万^{カウ}
五^{カウ}千^{カウ}八^{ハチ}百^{カウ}丈^{ターヴ}艘^{カウ}皆^{カウ}患^{カウ}、軍^{カウ}船^{ボウ}制^{カウ}、^テ每^{カウ}船^{ボウ}大^{カウ}施^{カウ}四^{シカウ}方^{カウ}
載^{カウ}セ^ス千^{シカウ}船^{ボウ}、^テ官^{カウ}十七^{シカウ}方^{カウ}ハ^ハ千^{シカウ}三^{サン}面^{カウ}、^テ移^{カウ}人^{ヒト}ト^{カウ}官^{カウ}四^{シカウ}方^{カウ}
千^{シカウ}三^{サン}人^{ヒト}其^{カウ}化^{カウ}少^{カウ}至^{カウ}嵐^{カウ}峯^{カウ}收^{カウ}於^{カウ}其^{カウ}也^ハ、又^ハ二^ニ百^{カウ}方^{カウ}人^{ヒト}今^{カウ}アリ
支^{カウ}富^{カウ}國^{カウ}之^{カウ}國^{カウ}也^ハ、^テ蒲厄利^{カウリ}近^カ來^ス清朝^{シカウ}貿易^{カウ}通^{カウ}セ^ス此^{カウ}毛^{カウ}ト^ト
前^{カウ}河^{カウ}岸^{カウ}泥^{カウ}ト^ト波^{カウ}不^{カウ}杜^{カウ}瓦^{カウ}尔^{カウ}、^テ四^{シカウ}高^{カウ}旅^{カウ}、^テタメシ^{カウ}サ^{カウ}ト^ト車^{カウ}ト^ト
貨^{カウ}物^{カウ}と^ト文^{カウ}易^{カウ}ス然^{カウ}、^テ蒲厄利^{カウリ}近^カ來^ス之^{カウ}也^ハ、^テ高^{カウ}壁^{カウ}、^テ貨^{カウ}物^{カウ}

主とムカシアラヌ勢漸序ナリ。國テ二國ノ禍ナカニサルトムテ
二國共此患エ。唐宋菴之文貿易レ來、賄賂ナツカヒテ薄
捕ヘシ。二國テ清朝ニテ甚ヌ清厄利西ヲ跡マシキニヤ。頗難行
ト。乃シ乾隆年中、主テ跡周セラル。且ハクシ端厄
利西之官吏ホト清朝ノ文貿易ヲ体シント。彼ノ評議有シトム
無シ。共漢支那ト東ナ清厄利西ノソニ控重スル。極基ニキテ
以四王郡官ト今議ミ支那内賄トム。我國ノ歸スル。甚キ
帝の意。シテ出シテ本トモ有マシケレハ。我國ノ。別住者ツカ
ハシ献ト。暨大三大臣エ云道。汝甚石子ニシテニ文貿易ノヲ取

ノルシテイテハ承認。潤之んキ。ムロヒトア嘉慶帝歎ミズル
ニムテ賀使。清厄利西二國ノ名譽ミシテ。陪
洋麻葛尙的波乙ナ。四使トシテ其派天文地理画術工技。あ
在ナシ。予。勝ミタル。高ム。ゆふ。シテ。數車ナ送。副はトシ。は
奇器書画等種。ふ。ゆ。と。窮。シ。ク。大。船。般。載。故。テ。清朝聘
少东アテ。至るコレヲ。帝。ム。シ。諸。ナ。臣。獻。ミ。於。是。年。和。親。ノ。丁。厚。ヲ
酒ヒテ。文。貿。易。レ。到。國。就。セ。シ。足。同。テ。乾隆帝。清厄利西。ナ。信
スル。石。比。チ。賜。ウ。ア。高。報。ナ。建。シ。ム。最。序。ナ。石。聚。ニ。シ。テ。ノ。ト。テ。唐
东。港。シ。旅。テ。西。洋。清。國。高。報。中。イ。キ。リ。ス。ノ。高。報。最。終。シ。ク。一。箇。

く堅城守後イキリス國ヨミ漢太學ヲ仰ミセンソナ欲シノ人食
ち耶之時ヨリ校ニツカハシテ時ヨハシム故ニ社ム詩ヲ歌シ文ナ作
モノアリトニ莫利末ハイキリス國良家ノミニテ幼年ノ時
シ材力絶倫弱冠ノ時ヨリ校ニ教授タリ漢太ニ遊學スルト
ニ嘉永年尊テフ車韵府ナイキリス漢之廟シ前ノ序文
化テ國板天支五音アリテ文武兼備シ英雄ナルナシテ機要
經と而作書ニ昇進シニテ昌時彦子玄父美夫都督補セラ
ル至南洋中屬國處置文易ニキニ勢シテ帝立意
之漏と食シ一千余艘之軍船シテ死配シテニ方入於小車ナ

撫御シ南島諸島之軍務總裁スル役ナリ

ちて諸有利害ニ失祀アリ載合而文節略シタルナリ若莫利
宗ノ自ラホルトナラハ宣易ナラサルトナルヘシ駿シ得シ相模西房
上尾也シ海濱甚るゆキリハアルカラス

東瀛逸氏曰昔時我邦商船大泥圓ト門丁互市スル一諸書
見ニタリヨ望賊鳥福弔ノ東西紀大泥ハ高貴謹重ヒテ
捨葛刺滿刺加所岐波尼医何东捕臺アシホシナシ唐連布貢取
ホ通商スル一絶エヌ故能萬國ノ勳靜ナ書シテ寔矣ニ忠
誠ノ計ニ隔ルトナレシナシ英國學子固ケタリトムモ堂より強

ニノ異アリ。ヨリ尽シカタレえ海乞ルコトキニ。家不居、
此、未コレカタルハカラス。然モ諱尼利。併存。スル。而、半全画丸
者也。テハ先高買人。店ヲ置。シ。未タ。ム。シモ其ヨリ
擧ニ。其植ヲ易エ。且。四朝ヲ奉。セシム。」有カラス。ト。所謂
括至。總房。と。犯。憂。ナスモノ。ヒトリ。玉都。ノ。恩。囁。スル。者
ヘシ。既。沿海。唐。辰。北。イツ。カ。四。ナ。土。ニアラ。サラ。何。ト。カ。日
下。ノ。民。有。サン。彼。字。穴。軒。海。ス。ラ。壹。慮。人。アル。處。ハ。ヌ。ム
虚。隙。ナ。寢。フ。況。ヤ。奸。虧。ナ。ヤ。若。丈。今。自。ノ。急。勞。奪。ラ。患。フ
ヘキ。ハ。ト。ニ。京。度。の。海。接。漕。運。ヲ。妨。ケ。ラ。レ。ハ。玉。都。ヒ。ナ。四。ノ。室

誠。孔。ス。ヘ。シ。此。本。ト。高。保。ノ。先。輩。既。也。淵。ミ。明。季。漸。ヒ。ノ
布。化。ト。ナ。ル。鞠。解。平。壤。ノ。凍。誠。ス。ル。一。傳。冠。運。漕。ヲ。妨。ケ。旨
一。時。ノ。被。レ。シ。一。彼。書。ニ。此。エ。クリ。況。ヤ。我。高。叔。サ。兵。ア。ニ。母。楚。
洋。中。賊。地。ナ。喫。大。セ。ハ。キ。ヲ。東。ミ。テ。種。熟。ヲ。敵。ヒ。シ。鳴。年。英
利。宗。役。監。ト。イ。ハ。キ。ア。ソ。も。ヒ。初。サ。ル。公。我。邦
祀。宗。神。靈。ノ。加。護。シ。仰。モ。手。下。云。ヘ。シ



